

第 70 回日本小児保健協会学術集会 シンポジウム 6

「こどもたちと『いのち』について考える～医療・
保健従事者だからできることは？」

いのちの授業
—奇跡がくれた宝物

小沢 浩（島田療育センターはちおうじ神経小児科）

—「いのち」ってどこにある？—
あたまかな？しんぞうかな？からだかな？
—「いのち」ってだれのもの？—
ぼくのもの？わたしのもの？
「いのち」ってなんだろう？

1. はじめに

新聞やテレビでは連日、いじめや自殺、不登校のことが報道されている。令和4年の20歳未満の自殺者数は796人¹⁾、令和4年度の小中学生の不登校児童生徒数は、299,048人である²⁾。自己肯定感が低く、やる気を見いだせない子どもが多い。

子どもが前を向いて歩いてもらうため、「いのち」と向き合うために、「いのちの授業」を行っている。

2. 「いのちの授業」の方法

「いのちの授業」は、田中総一郎の方法に従った³⁾。

- ①自分が生まれたときのことを家族1名からインタビューする。
- ②インタビューの内容を作文にまとめる。
- ③「いのちの授業」で作文を紹介する。
- ④障害児の紹介および体験をして障害について考える。
- ⑤授業の感想を書く。

3. 生徒の感想文（抜粋）

おなかのうえで寝てしまいその寝顔を見ているとお母さんはすごく幸せになったそうです。そして、僕が生まれたおかげでお母さんは強くなれたそうです。僕

は、みんなに幸せをはこんできてくれたそうです。僕はこの話を聞いて、すごくうれしかったです。

僕がお母さんのおなかから出てきた時、お母さんは、泣いたらしい。

僕は、こぶりだったらしい。

僕は、午後10時8分に生まれたらしい。

僕の大きさは、46cmだったらしい。

僕の重さは、1770gだったらしい。

僕のおでこには、しろうせいしっしんがあったらしい。

僕のおでこは、がさがさだったらしい。

それは、お母さんの甘い物の食べ過ぎがげんいんらしい。（チョコレート）

お母さんがいうには、やっと生まれた僕がかわいかったらしく、いっぱい遊んであげるからなとか思ったらしい。

わたしが生まれたのは朝だったそうです。病室から見た空が茜色になっていて、太陽のようにあたたかい人になってもらいたいと思ってこの名前をつけてくれたそうです。

私が生まれた時、あたまがとんがっていて母がびっくりしたって言ってた。

宇宙人かと思ったって言ってた。少しショックでした。

生まれてきた時は泣かなかったらしい。ヘソの緒が

首にまきついて泣けなかったのだ。病院の人が私のおしりをバシバシたたいて無理矢理泣かしてくれたらしい。だがせめてバシバシがよかった。

ばあちゃんは病気で1カ月後に亡くなるけどぼくのことを見るために病院に来てくれて、ぼくのことを見ると、なみだを流しながらよろこんでいました。

小さい頃の私について話してくれるのは、おばちゃんです。おばちゃんからの視点で聞いた話です。

小さい頃の私は、声が小さく、人見知りで母親にあまえていました。ですが、おばちゃんのことをいつの間にか大好きになっていました。東日本大震災の時は、家族がいないおばちゃんに私が「おばちゃ〜ん」と言って、走ってくるのを見たおばちゃんには、神様が自分をすくうためによういしてくれたのかと思ったそうです。

その頃の私は、母親がいなくとても悲しかったりさみしい思いをしながらも母親がいつかくるときたいしっていて、おばちゃんはまだ母親がこないことを知っているからかわりに愛情を教えてあげようと頑張ってくれました。私は、周りの人は母親がいるのに自分だけ母親がいないのに母親のことを何もいわずに耐えていたのがすごいとおばちゃんにいわれました。

二人目の赤ちゃんを望んでいたお母さんは病気でお医者さんに無理だと言われていました。東京の病院に通いやっと授かった赤ちゃんが紗矢香です。出産までもトラブルの連続でした。妊娠十ヶ月の時に腎炎になり、高熱で入院、お腹の子は大丈夫か不安で、どうかお腹の子は助けて下さいと祈り続けました。いろいろな事を乗り越えての出産だったので、本当に無事に生まれてくれてありがとうと心の底から感謝しました。

産婦人科の先生が、妊娠して無事出産するのがあたり前のように思われがちだが、無事に生まれてくると言うのは、それは奇跡なんだと話してくださいました。だから、あなた達が生きていると言う事は、たくさんの奇跡が与えてくれたかけがえのない宝物なのです。その尊い命を大切にしてください。

4. 作文後の説明

「生まれてくれてありがとう」
ここにいるみんなの家族の思いです。

「生んでくれて、育ててくれてありがとう」
ここにいるみんなの思いです。

いのちは自分だけのものではない

みんな愛される存在である

5. 「障害」の紹介

1) 障害を持っている人の気持ちを考えよう

①天井を見て顔を左右に動かしてみる。これだけしか見えない世界だったらどうだろうか。ベッドで寝たきりの人は、この世界しか知らない。だから、ベッドを起こしたり、車椅子で散歩したりすることが大切となる。

②目をつぶって立って体を一回転させて、もう一度座ってみる。立って回って座るという動作が、目をつぶるだけでこんなに難しくなるのである。

2) 視覚障害と言われている人の話

夜、電気をつけていないで過ごしていたのだが、そうすると訪れた人がいないと思って帰ってしまう。仕方ないので電気をつけることにした。

「夜、明かりがないと生活できない人たちって不便ですね。」と言っていた。

視覚障害と言われる人たちは、明かりがなくても生活ができる。点字が読める。我々が障害と思っていることは、我々と違うというだけで決めてしまっているのではないのだろうか。もし、夜に明かりがなくても生活できる人が9割、明かりがないと生活できない我々のような人が1割の世界だったらどうだろう。夜歩けるように街灯をつけて欲しいとお願いに行ったら、「夜明かりがないと歩けない一部の障害者のために、予算は使えません」と言われるかもしれない。障害と思っていることは、実は多数と少数の違いであり、障害者といわれている人は、我々の持っていない才能の持ち主なのである。

3) もらってくれてありがとう

桜の花びらが散り、若葉が顔を出し始めたころ、私の娘は生まれた。生まれた翌日に病棟に行くと、
「先生、おめでとう。」

Aちゃんのお母さんは私の娘の出産をとっても喜んでくれた。Aちゃんは生まれてからほとんどを病院

で過ごし、気管切開をして人工呼吸器をつけて日々過ごしていた。なかなか外に行くこともできない。お母さんは毎日病院に通っていた。しばらく娘の話をした後、少しの沈黙の後、

「もしよかったらうちの子の洋服をあげたいんだけどもらってくれる？」

とお母さんから提案があった。

「ありがとう」

と私がお礼を言うと、そのお母さんは更にこうつけ加えた。

「家に帰って奥さんに聞いてからにした方がいいわよ。」

私は、その言葉の意味が解からなかった。家に帰り早速妻に服をもらえる話をすると、妻も喜んでくれた。さっそく次の日に病院で A ちゃんのお母さんにそのことを報告すると、お母さんは、急にうつむいて手で顔を覆った。そして、ささやくような声で

「もらってくれてありがとう」と言った。その手の奥には、涙があふれていた。

しばらくして、お母さんはぽつりぽつりと話し出した。涙の理由（わけ）を…。

「友達に赤ちゃんが生まれた時にね、A の服をあげようとしたの。そのときに、やんわりと断られちゃって。だから、それから怖くなっちゃってね、ずっと押入れの奥にしまっておいたの。でも、先生だったらもらってくれるかもしれないと思って、勇気をふりしぼって言ってみたの。」

一週間後の土曜日、誰もいないロビーで待っていると、お母さんがそのベビー服を持ってきてくれた。両手いっぱい段ボールを抱えて…。お母さんはニコニコして段ボールを開けた。箱一杯に入った色とりどりのベビー服は、お母さんがもう一度洗濯をしてアイロンをかけたのであろう。きちんとたたんでいて、みんな新品のようにきれいで、そして温かい輝きを放っていた。再び服として生を受けたことを喜んでいてるかのよう。

「お下がり」。私たちは、子どもの頃、お兄ちゃんやお姉ちゃんが着てきた服を順番に着て、それを親戚や友達のお子さんにあげたりしている。服をあげる時には、そのお子さんの健やかな成長を祈り、そんな心も一緒に贈るものである。A さんのお母さんは、誰よりも強く我が娘の成長を祈ったことであらう。私の娘たちはそんな想いのいっぱいだった服を着て成長

した。

この出来事は、私が「障害とは何か？」考えるきっかけとなった。私は、日々、障害児という子たちを診ている。だから、服をもらうことも抵抗がない。でも、私がこの仕事をしていなかったらどうだろう。私も同じように断っていたかもしれない。A さんのお母さんも同じであらう。断った人、それは私なのかもしれない。だからこそ、このことを教えてくれる子どもたちに感謝するのである⁴⁾。

4) 不登校の子の気持ち

中学 1 年の女の子 B さんの作文を紹介する。B さんは、超低出生体重児で生まれた 3 つ子の一人である。
(作文)

学校（中学校）で整備委員になり、最初に行った時、何をすればいいのか分からず、居心地が悪くなりました。

楽しいと思っていたギター部も、思っていたのとはがく、行きたくなくなった。

英語が何かが何なのかわからなくなり、いつ当てられるのかビクビクしていました。

グループの人たちでバスケットをやる時も、私にパスをしてくれなくて、頑張っているけどできなくて仲間外れになるのと自分がうまくできなくてみじめに思うことが多くなりました。

月から金やっと学校が終わり、疲れはてて日曜日です。

夜になって、学校に明日行くのかと思い、いやな気持ちでいて、朝になり、もう何もかも逃げだしたくなり、学校を休んだ。

火曜日にも学校に行く気になれず、お母さんの電話する声が聞きたくなくて部屋にこもり、本を読んだりしていました。

おばあちゃんから

「外国には学校に行けなくてかわいそうな人がいるんだから早く学校に行くなら行く。行かないのなら手伝いをしたら」

と言われ、その時はやる気がなく何も感じない、ただの人形みたいになっていた。家にいても笑いもせず、ボーとしていました。何も楽しくなくて、何で学校に行けなくなっただろうと思っていました。

毎日夜お父さんからおこられ、朝はお母さんに質問され、疲れてどうして何もわかってくれないのかとか

もういやだなあとか死にたいなあとも思いました。

しばらくして心の教室に行き、カウンセラーさんにいろいろ相談しました。そんなとき、C先生に会いに行くことになりました。最初は中にも入りたくなかったし、ずっと車の中にいました。しばらくしてC先生と話し、薬をもらい、今は前みたいに暗くなったりしないのでよかったと思いました。お父さんもお母さんもC先生と話し、怒らなくなりました。でも、家の空気は重く、みんなしゃべらずとかくくらかったです。

そんな時、D君（兄弟）が鳥を飼うと言い、小さな箱にまだふさふさの毛のピッポを買い、すこしみんな明るくなりました。でも私の不登校はなおらず、いつもピッポといっしょにいてテレビを見たり、お昼ねをしたりご飯を食べたりすごかわいいです。一日中ピッポといたので、なついてずっと肩にのったりして、すごくいやされます。

今は不登校児を対象にした通級学級に行ったり、心の教室に行ったりで過ごしています。

心の教室に行ってカウンセラーの人と話をし、時々担任の先生と話をします。担任の先生から「心の教室に行けたのなら教室にも行ったらどうだ」と言われたけど、なんか心の教室に行くのと教室に行くのはちがうような気がするなあと思います。

授業のあいまに友達が来てくれたりし、給食から教室に行こうと思い、思い切って教室に行ってみました。最初はみんないつもみたいに話してくれて、でも、だんだん話をしてくれなくなり、今は二人だけ話しかけてくれます。

私が話しかけてもみんな無視をしたり、顔を見てすぐどこかに行ってしまったたりして、今はもう無視されるのがいやだから一人で本を読んだりしてあまり人に話しかけないようにしています。

でも前にみんなが話しているのを見て楽しそうだなと思い話しかけたら、

「空気読んでよ!」「じゃま」と言われ、つらくなり授業中泣いてしまいました。他にも

「どうして教室きたの?」

とかものすごい目でにらまれたり、

「死んどけ」

とか

「精神科に行った方がいいよ」

「手グロいね」

とか

「変な子に思われないうにね」

とか言われます。

言われたことをカウンセラーさんに話すと

「よくがんばったね」

と言われ、私が思いもよらない言葉が出てきてびっくりしました。私は「死ね」と言われた時はきずついたけど、あとは別に「ああ、そうか」と思うだけで別につらくなかったです。よく「死ね」とふざけて言う人がいるけど、初めて言われた時はもうぜったい思っても言わないでほしいと思いました。

不登校児を対象にした通級学級に行き始めて、みんな

「おはよう」

と言ってくれて、その場所がいやとか好きとかではなくて、

「ああ、私ここにいるんだ」

そう思っています。

学校に行くのと不登校児を対象にした通級学級に行くのはちがうなあと思い、今は他の学校に行こうかなと思っています。その学校は、楽しそうだなというのが一番思っていることです。よく楽しかったことは?と聞かれ、とくにないなあと思い、他の学校へ行けば楽しい事があるのかもと思います。

みんな勉強しているのに私はただ楽しむことしか考えなくて、じゃあ勉強教室で受ける?それはつらい。じゃあどうすると考えて混乱し結局学校に行けないと思うことが多くなりました⁹⁾。

5) 「幸せ」について

「幸せ」について考える。

勉強ができて、いい大学入っていい会社に入れば「幸せ」なのだろうか。仕事につまずき、悩んでいる人もいっぱいいる。

お金持ちが「幸せ」だろうか。生活に必要なお金はないと困るが、あり余るだけのお金を持ち、そのことで不幸になっている人もいっぱいいる。

学歴やお金は「幸せのかたち」をつくるための道具として必要なものであり、いい道具を持っていたても、うまく使いこなせなければ意味はない。

私の外来には障害といわれる個性をもった子どもがやってくる。子どもを中心にほのぼのとした家族がやってくる。そこで改めて「幸せ」について考える。

人間はみな平等。人はそう言う。でも本当にそうだろうか。かけっこが遅い人はどんなに頑張ってもかけっこが一番になることはできない。人の才能は平等ではない。環境も平等ではない。でも、自分のおかれた才能や環境の中で、感謝の気持ちを持ち「ありがとう」を伝え、笑って過ごす。その中から「幸せのかたち」を作っていくことはできる。その意味で、人は平等なのであり、我々はそのお手伝いをさせていただいているのである。

6. 感想文 (抜粋)

私の母に宇宙人と言われて、しょっくだったけど、その話を聞いた時には、やっぱり感動したって言っていた。そして、今日のお話を聞いて、どのお母さんもそう思っているんだなあと思いました。

いろんな人の作文を聞いて、やっぱりこの命は大切にしないといけないとすごく思いました。障害がある人も、一生懸命頑張って生きているのだから、わたしも産んでくれた母や、ここまで育ててくれた家族やみんなに、感謝して、この命をむだにしないようにして、生きていこうと思いました。しかし、わたしは障害がある方が、すこしこわいと思ってしまいます。でも、その人も人間です。だから、普通に接していこうと思いました。

目をつぶって立って、1回まわって、座るという動作をしたときは、すごくこわかったし、立ったときよろけたり、座るときもどこに座ればいいのかわからなくて本当にこわかったです。だから、障がいのある人はこんなにこわいおもしろいを毎日してるんだなと思いました。きっとわたしにできることはあまりないと思うけど少しでも障がいのある人がよろこんでくれたり幸せな気持ちになってくれたらいいなと思いました。

私は今まで、しょう患者という「かわいそう」と言う言葉がうかんでいました。でも、今回「命の授業」でしょう患者も仕事を一生懸命やっていると言うのを知り、しょう患者は「かわいそう」ではなく「すごい」と思いました。

私たち普通の人より困難なことが多い中、あきらめず働いていたからです。そして私たちと同じ生徒の生まれを知り、お母さん、お父さんと助け合って生きて

いこうと感じました。「命の授業」をやっていなかったら、親へのぼう言が大きくなっていたと思います。改めて家族の大切さを知ることができました。

今回の話の中で「不登校」の話題がでてきました。私の姉は中学生の頃に不登校の時期があって、学校に行かなくて、家にいたんですけど、私は当時、小学1〜2年生だったので、「なんで行かないんだろう。」と思っていたけれど、姉の様子を見ているうちに、行きたくても行けないんだ、朝が起きたくても起きれないんだというのを幼いながらに知ることが出来ました。なので、小学校でも学校に行けない人がいても、何も思わなくて、私と同じような子でただ学校に来ていないだけという風に思えることが出来ました。なので、姉にはとても感謝をしています。自分もいつこうなるのかなんて分からないことだし、だからといって、学校に来ていないことは悪いことという風に考えることは違うと思います。今回の話を聞いてより、不登校の子について知ることが出来、また新たな視点でみんなのことは見ることが出来るので本当に良かったです。ありがとうございました。

今回の授業を受けて、障害を持つ人も、私たちとあまり変わらないということがよく分かりました。同じ人なんだから、同じように接していけばいいんだということが改めてよく分かりました。私の妹は、軽いけど障害をもっていて、ふつうの子より少し遅れています。昔何度か妹が少し遅れていることで他の人からかわれたことがあって、私はとても悔しかったです。なので、今回の授業を受けて、改めて障害があってもなくてもあまり変わらないということを知ることができて、うれしかったです。

—「いのち」ってどこにある?—

すべてにある。ほくにも、わたしにも、鳥にも、虫にも、花にもすべてにある。

—「いのち」って誰のもの?—

みんなのもの。お母さん、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃん、ほくを育ててくれたみんなのもの。

文 献

- 1) 警察庁. “自殺者数”. <https://www.npa.go.jp/publications/statistics/safetylife/jisatsu.html>

- 2) 文部科学省初等中等教育局児童生徒課. “令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について”. https://www.mext.go.jp/content/20231004-mxt_jidou01-100002753_1.pdf
- 3) 田中総一郎. いのちを大切にするってどういうこと? チャイルドヘルス 2012; 15: 746-747.
- 4) 小沢 浩, 編. 奇跡がくれた宝物—いのちの授業—. 京都: クリエイツかもがわ, 2014.